



備
落
世
知
の
尾

利9
3869
62



利日
3869
本 62

序

あゝ洲唱祖坊素端おきき 麦林舎氏門に
於の俳諧の流に窺ひて 亦茶附ちりしを
編るるを 亦一 兼ありて 里に 謀國に
あゆむる 風の名を せん 押さへて
去るる 俗語 油白 けり ありて
只々 たに 抄るる 亦ありて 志す 可成も
傳集の 狩集の 序を 亦ありて 亦ありて
集の 思ひ 亦ありて 亦ありて 亦ありて
亦ありて 亦ありて 亦ありて 亦ありて
亦ありて 亦ありて 亦ありて 亦ありて
亦ありて 亦ありて 亦ありて 亦ありて

大正八年 四月 十六日
室井平藏 氏 贈

書くお上落きも、この集のてい
けいも、たのむ書らるゝのよつけり
固らば、その里人、才免、唐、東、西、の
類、そのあつた日、乃、唯、中、一、め、る、あ、つ、た

ふゆえ
午の年



副言

四文字、仮名を、野々、せ、る、も、の、あ、つ、た、
た、つ、た、毎、に、長、短、あり、是、の、類、の、長、短、
み、つ、た、乃、長、短、に、あ、つ、た、は、
その、中、の、つ、ま、ま、つ、た、は、
長、短、あり、は、も、つ、た、は、
は、つ、た、は、
は、つ、た、は、
は、つ、た、は、
は、つ、た、は、

原中て女房と申す小碎たはれ
え日乃笑ひ上戸を月出さかり
の春に五日乃ゆりゆり
舟形ひみ唐乃丸軍形おけり
猿童屋のあはあは
せきあんとまといの
いさよのそをすひて
笑ひ顔て地乃乃首ハ
碎たおれ、花やうきとまん
派是う小川一

能清せきまの降節

神行や伴遊の山田と冠
子あは又神金の冠もあは
出くはを流く白とあは
まーとあはまーもあは
二は探むるれもあは
さほくそをひもあは
とまーあはをあは
のちねあはん

夫ゆゑに...
 頃白...
 何れ...
 こゝに...
 長...
 事...

寛政二庚辰月

母中書

三



夫ゆゑに...
 頃白...
 何れ...
 こゝに...
 長...
 事...

名の用と云れり 州一七
姫子花年一姉 如ク定りん
入山と云へり 虫の鳴き声
少ぬ親と云へり 吐く声
隣の小判のちを 如くしり
醫者とのし 強りきの
ふらふらと云へり 如くしり
備及六よき けり 如くしり

あんなふさふさ 如くしり
ちのちのちのち 如くしり
はくちのちのち 如くしり
小はくちのちのち 如くしり
ちのちのちのち 如くしり
ちのちのちのち 如くしり
ちのちのちのち 如くしり

はあらかしめく二海あり
うき世の君あり月々のたぐひ
奪くくんと頼むかたあり
御業を世に用くちまはれ
まはれまはれ二人の中はあはれ
をぬんとおぼえはれぬ
はるあはれひあはれはるあはれ
おくらぬたのこを御中あり

柳枝よ水鳥たてく角田川
おぼえよと人はあはれあはれ
あはれをたてぬあはれあはれ
二目目々馬の四五万乗けり
娘自惚く娘人のまをんあはれ
山の神の怪氣をたてぬ
神道の娘あはれあはれ
おしくと親のかはれあはれ

おしくとまゆの隣に於て
口あつて海をよい水と云ふは
くんさくしゆのひをいふをあり
蓮を二物ぬき掛く至

母中居選

寛政三庚戌正月

菘子まきまらるるうまひて故と
軒下にてあつて馬よりあきるなり
元乃女房の針を能く用ひて
下り板にあつて毒にらるる
あつてを考へて吉日にせめ
約束するは多の黒い水鶏
あつての洞子心乃極み
あつての窟ろ及きくは口を利
湯上り此新へ一篇割れ
あつての窟ろ及きくは口を利

松花庵

幽子

天山

原中乃孫、以方へり、東都相伊
 鼻依を以て、お給う、三世
 若人、お給う、お杖を、
 了つて、お給う、
 中分ハ、お給う、不二の山
 三つて、お給う、お給う、
 お給う、お給う、
 風泉
 竹の子、お給う、
 攻め

七

進上し、お給う、
 忠臣を、お給う、
 江戸し、お給う、
 いおき、お給う、
 車
 女、お給う、
 素乃

はらハ平家馬より傳へし
 名紙を物にかきしは秘録一
 女より傳へ女房對讀する氣は
 面倒を借ぬや嫁の帆を号
 守りぬる及中絶つらき事
 牛三つに匹ら是り出る下女
 三番ゆゑの名人を誇めこそくろり
 極り疾くを答ふそ降る音あり
 降る音あり付のあはれに降る有
 是るを笑ふそ秘録書をあり
 友河

十

養育く徳君形なり初と法
 人多く海より久しき論辨あり
 かくやくたえ日のあはれりあり
 多分たに花園のあはれりあり
 掃先をひきききとみよの日々あり
 老人ハ家の舟のあはれりあり
 細乃をそよ乃の杖りてはれりあり
 立字の物折梅のあはれりあり
 鼻うさぎと違割りありあはれりあり
 是のせのすくぬりてあはれりあり
 免海

素川

酒々申すし〜と御し
杯乃下の風り大蛇の湯
うらうら〜移ま〜
忍ひ〜
欲ゆに物〜
傳〜
売物〜
竹藪と〜
洞市乃〜
風〜

春砂

麦店

士

幽〜
眼〜
庭〜
若〜
伴〜
初〜
務〜
名〜
目〜
百〜

壽扇

定丸

昔よみのの松子を解し一松あり
一生を牛の鼻あつたにけりて
掃先一月りたはれて去るる
酒はては儀もつたの酒の花
江戸といふくをちらさらう
石地帯の喧嘩いふ振のきり
大ゆり流星の去んとて
氣さしし昔とあつたきり
出たつたの嫁はきりけ
さる結の舞ハ月足さる

花鳥

李探

十二

首さけて花のうらさめ
退屈の度あつてし
新室一山く女房のきり
素直もあつた加は
兜首をとつて
春の日はさつた
浮月一浮石の
定りしせぬに
氣に入つた
きりつた

橋庭

湧泉

心見の酒にうこうぬ石の縁家
うさしのの足り名所一たしぬあり
おとすく一才やりの雨りさく
たぬくいさあそと花舞あめり
念をうさきめやうに二日破
有る軍のまるとお膝ふ茶白山
目のそくそ命のそりさくさく
やうつさく園にそをやうさく
そるのそくさくあてりり園さく
開きおのあさくさくさく

太周

新方

十三

被く計のころうをさくさく
出さすの初事した又おさくのあさく
ぬけ勢をぬ房一生ふんさく
さくさくさくさくさくさくさく
生娘も改にすさくさくさく
物りめいさくさくさくさくさく
やう月市のぬさくさくさくさく
さくのあに陶の脈をぬさくさく
おさくさくさくさくさくさく
ぬさくさくさくさくさくさく

益友

鬼山

編の月も仲の白くあつた女が
女房よりく翔くことを老女
のとうりも女房も知せし
後此の如くして老を去る
女の老い入るのうらから
笑ひてせん之何うらまて
老の肉より女とせぬは
砕我を叫ぶ天乃口と
道達に我くらさるる
や卑の叫ぶ 海もの

一樹

計程

十四

はるるあつたつて老を去る
彌たんも三日の侍て干て
女の老い入るのうらから
笑ひてせん之何うらまて
老の肉より女とせぬは
砕我を叫ぶ天乃口と
道達に我くらさるる
や卑の叫ぶ 海もの

山狂

素元

松のしをわてくく 伴人さるぬり

砂流

まへからぬの敷布くさぬく
猿の女を穿ちて捲らぬれり
まを穿ちて穿ちて穿ちて穿ちて
あらぬの松 松 鳥とく
悟れぬのまつにあきなり
日くけにまぬれ日傘も信まき
つきと合て日ぬり人少候
松の肉の小さく 梢へ上させ
くくあへくくく 成て書きまき

素向

十五

大兩の歌集とくもをへて又り
千本鶴へ白ひもあてぬ
裏のてお七くぬにぬらぬ
盗酒の介うらぬぬ 餅の松
鼻毛と天智天皇うらぬぬ
洗くぬぬぬ上のぬぬぬ
まぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

素雀

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

婦ニ

むきやうに志をなすは地の旅
山形の嘘々視の海をさる
その年のく 白くすくに号を
新電のちりを燕子うよき
やううに抄さしと戸をたたく
仁王の御事の新入るの宮の
猫とあす介つと信の家姫
音もよく出さぬを敵つてけり
一本橋をなめてけりてよちけたり
あつちうな上に十日のころあり

一和

一楓

十六

炬にありぬひの足持んは
花をささぬ肉く 竹す
きくくくさくく山のけり
及事くぬぬのくある雨合
仕合くまふの味ハ ぬあり
極楽ハ ぬあり ぬあり
馬ちの娘ハ きたにまふまふあり
娘ハ きたに ぬあり ぬあり
梅灯のちるぬありを包かぬあり
義理合のそくちぬあり ぬあり

素岳

カクイ
素泉

みづけのめいめいあはれしく見え
なすり解く一を移るとめいみき
けいけのやうと一と年ありあつ
るつらと昔のやうと昔のやう
おやうとんに面白くおぼれり
そとへはあふりうりなをつげ
はるくはあつと年々おれり
おぼれり其年を過ぎる層り
おぼれり其年の再々若くする
おぼれり其年の洞々若くする

素角

素角

十七

おぼれり其年の洞々若くする
おぼれり其年の洞々若くする
おぼれり其年の洞々若くする
おぼれり其年の洞々若くする
おぼれり其年の洞々若くする
おぼれり其年の洞々若くする
おぼれり其年の洞々若くする
おぼれり其年の洞々若くする
おぼれり其年の洞々若くする
おぼれり其年の洞々若くする

鳥口

友交

此よりとりり入舟の月にかげり
 古れを思ひ出せを 掃り落
 女を房を去りせし 流るも
 山ありの恨と鹿の毛にあらせ
 あらそこの後家水泉の跡跡
 狂舞るおのけいせんの罪もあし
 お終の宵にうめうめの心もあし
 大文まつあしのく色もあし
 柳もあしのく心もあし
 遠のあきとあめふりの心もあし
 小暮

大

巳五日ハ今々春ハ入り
 本年ハ花咲くの心もあし
 らい心ツのく心もあし
 来日とくの心もあし
 らへ旅人の旅の心もあし
 来日ハ心もあし
 馬と川の心もあし
 ちとらの心もあし
 明寺の心もあし
 律の心もあし

琴塘

後くくと枯舟く地並出現
姿の柳と心いさ、まゆをまゆ
山奥の猿あり、物とあそぶを
月夜の社も花知舟ハ大倉へて
あけやりにさるのあくさるの
もえあくうかく揚枝まき
とあそびにまよもせぬ 信濃の
雲はくやうくに月とまき
下管と時ありに出るひと者
是るまきまきとまきをふらま

車輪

朱清

十九

鉄船に村中をすく浪もあ
めりしものひらひの船の腹うら
まのうらひのうらひの極うら
はまのうらひの極うらひの極
能くまのうらひの極うらひの極
めつての極うらひの極うらひ
あつての極うらひの極うらひ
あつての極うらひの極うらひ
あつての極うらひの極うらひ
あつての極うらひの極うらひ
あつての極うらひの極うらひ

素冬

素冬

あつての極うらひの極うらひ

一を酒とちめそふあつて解舟の酒
 二を名もたれて小舟にたてし
 三を名もたれてまきあつて中を掃き
 四を名もたれてつとをわんてまきあつて
 五を名もたれてはるの別所目まき
 六を名もたれて竹先まきあつて
 七を名もたれてはるの徒歩射し
 八を名もたれてあつて
 九を名もたれてあつて
 十を名もたれてあつて
 十一を名もたれてあつて
 十二を名もたれてあつて
 十三を名もたれてあつて
 十四を名もたれてあつて
 十五を名もたれてあつて
 十六を名もたれてあつて
 十七を名もたれてあつて
 十八を名もたれてあつて
 十九を名もたれてあつて
 二十を名もたれてあつて

田加
 馬調
 小松
 兔榎并
 素丹
 東地舎

油取もたれく日のくくく四里四方
 一を名もたれて二尺三寸まきあつて
 二を名もたれて一尺五寸まきあつて
 三を名もたれて一尺二寸まきあつて
 四を名もたれて一尺まきあつて
 五を名もたれて一尺七寸まきあつて
 六を名もたれて一尺四寸まきあつて
 七を名もたれて一尺一寸まきあつて
 八を名もたれて一尺八寸まきあつて
 九を名もたれて一尺五寸まきあつて
 十を名もたれて一尺二寸まきあつて
 十一を名もたれて一尺九寸まきあつて
 十二を名もたれて一尺六寸まきあつて
 十三を名もたれて一尺三寸まきあつて
 十四を名もたれて一尺一寸まきあつて
 十五を名もたれて一尺八寸まきあつて
 十六を名もたれて一尺五寸まきあつて
 十七を名もたれて一尺二寸まきあつて
 十八を名もたれて一尺九寸まきあつて
 十九を名もたれて一尺六寸まきあつて
 二十を名もたれて一尺三寸まきあつて

百水
 活寸
 兔因
 枕岱
 赤良
 素五
 素丈
 砂御
 素雀

雪乃日の十八丁に傳ひり
 勝軍の敵地乃花に多る
 神の鳥にそれる石あり
 山のおけに伝はる人
 久々の乳母り
 反轉 非人の
 ぐんらんを福く

素七
 杉聖
 龍馬
 龍
 采破
 杵秋

瘦大り花乃里
 心ありの名を
 人童に童子り
 形はく
 守集も
 人
 立格
 酒反吐に
 女房ハ

十兔庵
 素川
 素道
 車隣
 定丸
 三世
 風泉
 素道
 車隣

すいなきを 梅千のやうに 去り
 三番 變て 目玉の如き 松葉の
 吹 藏へ 去る 去る 去る 去る 去る
 女に 女の 骨を かく まる
 年 暮て 死ぬ 上へ 下へ 有
 知 算 算 も 碎て 去る 人の 如く
 来 年 へ 来り 去る 去る 去る 去る
 子 傳へ 柱に 入る 如く 去る 去る
 出 代 乃 下 女 は 庵に 名を 残し
 大 以て 天 物 印 を 去る 去る

定九
 印字
 風泉
 印字
 幽子
 素風
 發流舎

等 登乃 松へ 吹る 去る 去る 春
 い き 心 の 加 勢 に 胸へ 男 山
 お 心 に 春 あり 去る 去る 去る
 夕 々 の 日 々 春 旅 に 去る 去る
 春 旅 ち 去る 去る 去る 去る
 昔 川 分 に 去る 去る 去る 去る

山猿
 真風
 茂夕
 柳枝
 三真

文政五年^{壬午}八月

東都日本橋四日市

相模屋伊助

書林

同

招屋善八

板

Handwritten text in cursive Japanese (sōsho) style, consisting of several vertical columns of characters.

去
一
行

不
封
一
有

行
月
可

在
月
也

實
可

在
月
也

行
月
也

在
月
也